

の影響があるのではないかと考えられた。

### 18. 骨軟部疾患における Dynamic Bone Scintigraphy の有用性について

星子 尚美	山下 康行	仏坂 博正
古閑 幸則	宮尾 昌幸	吉岡 仙弥
広田 嘉久	吉井 弘文	高橋 瞳正
(熊大・放)		
藤村 憲治	(国立熊本病院・放)	
別府 進	(三井三池鉱業所病院・放)	

原発性悪性骨腫瘍、転移性骨腫瘍、良性骨腫瘍、悪性軟部腫瘍など計44例の骨軟部疾患について Dynamic Bone Scintigraphy を施行した。

原発性悪性骨腫瘍では、Vascular phase より集積が90%以上の症例に認められ、転移性骨腫瘍、良性疾患では約40%, 35%であった。

また、骨X線所見との比較も併せて行い、通常の Bone Scintigraphy に Dynamic Bone Scintigraphy を追加することによりある程度の質的診断の可能性が示唆された。

### 座長のまとめ (16~18)

坂田 博道	(鹿大・放)
-------	--------

演題16は、大理石病患者の骨シンチおよび骨髄シンチに関する症例報告で、骨髄シンチでは貧血は伴わないと、中心性骨髄のup-takeの低下、頭蓋骨、四肢骨のactivityの上昇が認められ、興味深い所見であった。

演題17では、<sup>99m</sup>Tc-MDPによる骨スキャン1,653例中33例に骨外集積が認められ、部位別では乳房16例、肝5例、腎5例、その他7例であったと報告された。肝へのdiffuse uptakeの原因として、宮医大星よりcontaminationの可能性はないかとの質問がなされ、その可能性も十分考えられるとの答えであった。

演題18は、骨軟部疾患における Dynamic bone scintigraphy の有用性についての報告で、<sup>99m</sup>Tc-MDP静注後、血管相(0~1分)、早期相(5~20分)、後期相(3時間)の3相に分け検討した。軟部腫瘍では血管相で集積(+), 後期相で集積(-)を示すものが多く、また原発性

骨悪性腫瘍では転移性や良性骨腫瘍に比べ、血管相での集積陽性率が高く、ある程度質的診断が可能であると考えられた。

### 19. 十二指腸結石の1例

矢野 潔	水上 忠久	越智 澄夫
(聖マリア病・放)		
山本 正士	(同・小児)	
赤岩 正夫	(同・小児外)	

6歳男子、鉄欠乏性貧血にて受診、消化管透視にて胃変形と十二指腸部の膨隆を認められた。<sup>99m</sup>Tc Scanにて十二指腸憩室と考えられたが、手術によって十二指腸結石であり、その成分はサクサンビニールであった。

### 20. 肝および肝胆道シンチグラフィにて描出された肝分葉異常の1症例

荒川 敬子	星 博昭	木原 康
涌田 裕司	陣之内正史	渡辺 克司
(宮崎医大・放)		

生下時より腹壁ヘルニアを認め、肝分葉異常を合併した症例を経験したので報告する。症例は17歳女性で、生後より数年に1度の割でsubileus症状が出現し、入退院をくり返していた。今回、腹壁の術創に対するcosmetic surgeryを目的として入院し、手術を行ったところ、肝および胆囊が腹部左側に認められたため肝の位置異常が疑われた。術後に肝および肝、胆道シンチグラフィを施行したところ、肝は正常位置にも存在し、術中にみられた腹部左側の肝は下垂した異常分葉であり、胆囊はその右側に付着していることが判明した。

### 21. 腎シンチグラフィで確診できた左尿管腫瘻の1例

綾部 善治	吉田 道夫	茂松 悅之
(国立別府・放)		
平野 遙	松本 哲郎	(同・泌)

尿管腫瘻は、大部分は、特に婦人科の疾患の手術など、大規模な骨盤部の手術後に見られる。その診断は、一般に行われる色素排泄試験陽性で、排泄性尿路造影や逆行

性尿路造影により、造影剤の尿管外溢出が証明できれば容易である。今回、33歳女性で、子宮腔上部切断術後尿管腔瘻が疑われたが、上記検査では診断できず、 $^{99m}\text{Tc}$ -DTPAによる腎シンチグラフィにて、左尿管下部から骨盤部に拡がる尿路外の放射活性が認められ、左尿管腔瘻と確診できた一例を経験したので報告した。なお、 $^{99m}\text{Tc}$ -HSA 膀胱内注入による膀胱シンチグラフィも行ったが、膀胱腔瘻は認めなかった。

## 座長のまとめ(19~21)

勝山 直文

(琉球大・放)

演題 19：胃に近い十二指腸などに狭窄があると RI が停滞し、メッケル憩室との鑑別が困難であることを示した興味ある一例であった。

演題 20：肝分葉が著明に腫大した一例で、肝分葉異常の文献的考察が行われた。

演題 21：X線検査で尿管腔瘻の診断ができず、RI 検査で確診がついた一症例で、微量のものの測定やイメージングに RI が有用であることを示した。